

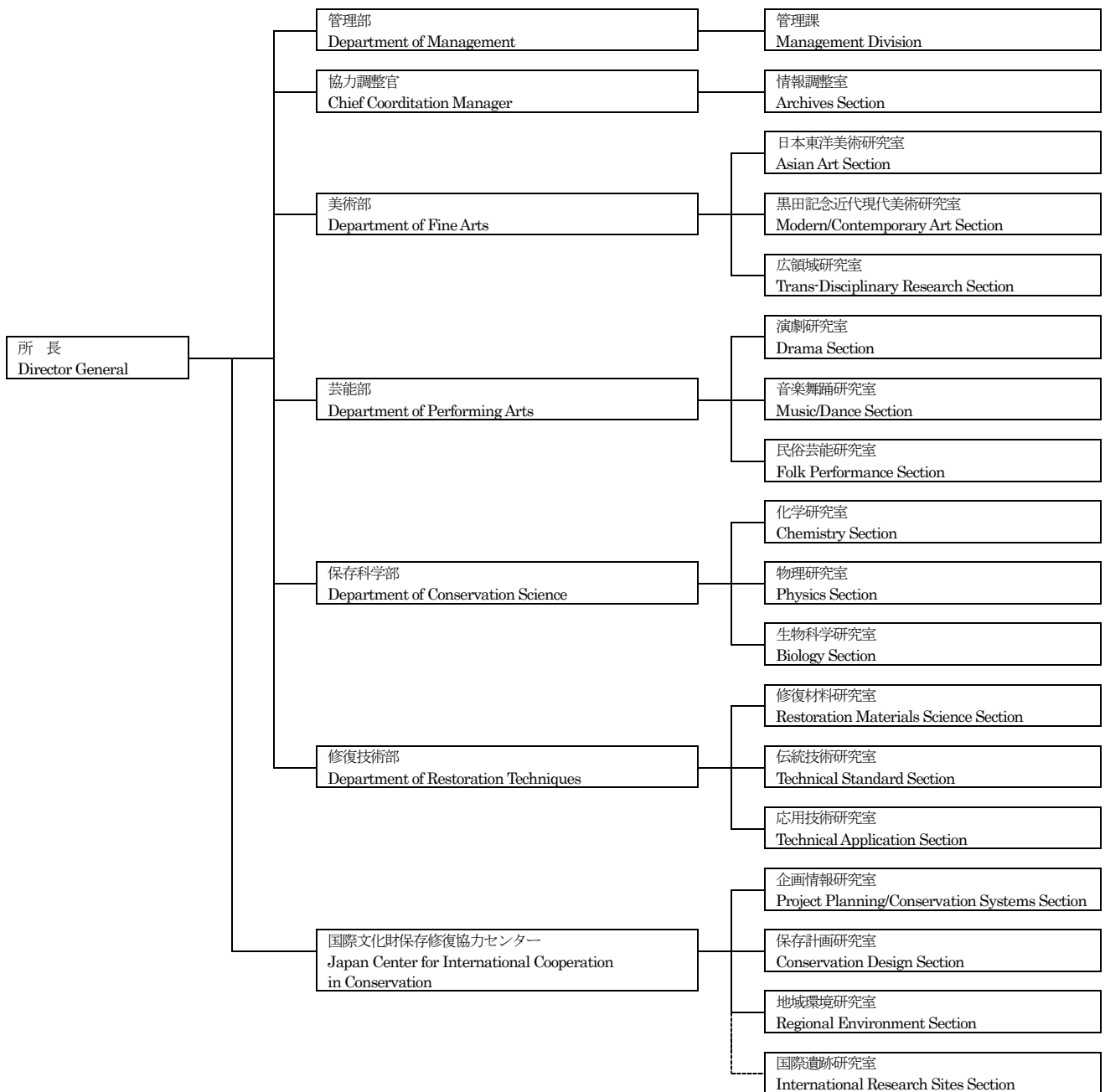
1. 機 構

1. 組 織 図

独立行政法人東京文化財研究所

Independent Administrative Institution

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo



2. 組織の概要と職員

所 長 鈴 木 規 夫 (工芸史・文化財学)

(1) 管 理 部

管理部は、管理課に庶務係、企画渉外係、予算係、経理係を置いて、東京文化財研究所の事務部門として庶務、人事、会計、施設管理、国際交流、研究支援の業務を行っている。

独立行政法人化4年目の本年度は、法人本部と連携を取りながら年度計画の作成・予算の執行及び評価委員会関係資料の作成、諸規則の整備、会計システムの運用を図るとともに一般管理費の経費削減、及び業務の外部委託・事務のOA化を推進し行政コストの効率化を図った。

庶務係

東京文化財研究所における業務方法書の変更、中期計画及び年度計画の取りまとめ、事業年度の業務実績についての評価委員会の評価に関する事務を行っている。また、情報公開に関する事務、秘書業務に関する事務、規程の制定改廃に関する事務、文書の授受・発送に関する事務、文化庁等の他機関、法人本部及び所内の連絡調整に関する事務、人事管理に関する事務(日々雇用職員、時間雇用職員、客員研究員、調査員、協力研究員の任免に関する事務を含む)、共済組合に関する事務、栄典及び叙勲に関する事務等を行っている。

企画渉外係

海外渡航に関する事務、研修及び国際研究集会等の実施に関する事務、国際交流等に係る政府機関及び関係団体との連絡調整に関する事務等を行っている。

予算係

財務諸表の作成に関する事務、決算報告書の作成に関する事務、監事及び会計監査人の監査に関する事務、予算・決算に関する事務、資金管理及び出納に関する事務、諸謝金及び旅費の執行に関する事務、研究助成に関する事務等を行っている。

経理係

毎事業年度の業務の実績に係る資料作成に関する事務、給与計算及び給与の支払いに関する事務、物件費の執行に関する事務、物品及び役務の調達、契約及び管理に関する事務、会計関係事務電算機の保守管理に関する事務、建物及び設備等の管理に関する事務等を行っている。

<組織概要>

| | | | |
|--------|-----------|-------|---------|
| 管理部長 | 萩原 寿 郁 | | |
| 管理課長 | 伊藤 義 雄 | | |
| 課長補佐 | 池田 広 美 | | |
| 庶務係長 | 若月 雄 二 | 予算係長 | 村岡 俊 |
| 事務補佐員 | 安本(緑川)明日香 | 事務補佐員 | 山内 奈菜子 |
| 事務補佐員 | 小泉 朋 | 事務補佐員 | 神谷 顕子 |
| 事務補佐員 | 大西 加奈子 | 事務補佐員 | 丸山 智子※1 |
| 企画渉外係長 | 渡邊 仁之 | 経理係長 | 菊地 昌弘 |
| 事務補佐員 | 橋本 佳代子 | 経理係員 | 蛭川 聖二 |
| | | 事務補佐員 | 川井 理恵 |

※1平成16年7月31日辞職

(2) 協力調整官—情報調整室

協力調整官は、外部からのさまざまな協力依頼に対して、研究性の高い結果報告をまとめるために、各研究部門の協力体制を調整する。情報調整室は、所内の情報システムを管理するほか、各研究部門の研究成果を統合し、外部へ発信する役割を担い、広報企画関係の事業を行うほか、資料の作成を公開を担う資料閲覧室・画像情報室を統括している。

資料閲覧室

資料閲覧室では、文化財関連の図書や定期刊行物、展覧会カタログ、写真資料などを、月・水・金の週3日、一般の利用者に対して公開しているほか、各種の書誌データベースを作成している。図書資料等はオンライン検索が可能で、貴重性の高い明治大正期の雑誌は、マイクロフィルム等で閲覧することができる。写真資料は、主題別・作家別に分類・配架されている。また研究情報の公開性を高めるため、所蔵資料のデジタル化と目録作成を進め、同時に刊行物としても提供している。

画像情報室

画像情報室は、各研究部門の依頼にもとづいて文化財を画像情報として記録し、画像資料を作成している。また光学的理論やデジタル技術を応用した最先端の手法を開発・駆使しながら、研究情報を視覚的に提示している。

協力調整官—情報調整室は、現在、8つの事業を推進している。近年、研究情報に関する需要は飛躍的に増加し、またその内容の高度化が求められている。その要請に応えるべく、画像形成技術の開発に関する研究の中間報告書及び蔵書目録の刊行、近現代美術展覧会カタログデータベースの公開等を行ったほか、内外のアクセスを高速化するべく、既存のインターネット環境やネットワーク環境について、一部、見直しを開始した。各事業は、1) 日常的なルーチンの情報化とその推進、2) 研究情報の自己評価、3) 研究情報の外部発信と共有化、の3つの観点から相互に関連づけ、総合的な運用を図っている。

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| ①画像形成技術の開発に関する研究 | ②システム管理 |
| ③広報企画事業（ニュースレター・概要・年報） | ④資料閲覧室運営 |
| ⑤所蔵目録作成・バーコード化 | ⑥画像資料の収集・整理 |
| ⑦写真機材・設備 | ⑧ホームページ及びデータベースの作成・管理 |

1) 日常的なルーチンの情報化とその推進

情報化の核となる所内ネットワークシステムは、LAN 委員会を主宰し、情報システムの効率化とホームページの充実について協議している。また、イントラネットシステムを活用して所内の情報化を進め、情報公開の要請に即応できる体制を整えている。画像形成のルーチンは、最先端の技術革新に即応したデジタル化を推進しており、画像管理と内部閲覧を目的とする画像データベースも運用している。

2) 研究情報の自己評価

研究情報は、まず所内各研究部門の多角的な視点から、日常的な自己評価を実践する必要に鑑み、協力調整官とともに所内総合研究会（年6回程度）を企画し、あわせて年報を編集している。

3) 研究情報の外部発信と共有化

研究情報は、ニュースレター・概要・年報・ホームページ等を通して外部に提供している。とりわけホームページ及び外部公開データベースは、昨今のブロードバンド時代に対応すべく、より一層の充実を目指している。

<組織概要>

| | | | |
|-------|------------------|--------|----------------|
| 協力調整官 | 三浦定俊（計測工学） | 情報調整室長 | 山梨絵美子（日本近代絵画史） |
| 同研究員 | 綿田稔（日本中世近世絵画史） | 同研究員 | 皿井舞（日本彫刻史） |
| 専門職員 | 城野誠治（画像情報室・画像形成） | 事務補佐員 | 中村節子（資料閲覧室・司書） |
| 事務補佐員 | 中村明子（編集補助） | | |

(3) 美術部

美術部は、日本および東アジアの美術に関する調査研究を行い、美術史研究のための質の高い資料や情報を作成し、それらを積極的に公表することを目指している。

日本東洋美術研究室 江戸時代までの日本美術と東アジアの美術を研究する。
黒田記念近代現代美術研究室 明治以降の日本美術の研究を主に、現代美術の動向をも調査する。
広領域研究室 美術のジャンルや時代、地域を横断する課題に取り組み、人文科学の他の領域や、自然科学、社会科学の諸分野と連携して広い視野から美術を研究する。

(1) 美術作品の実証的な研究：美術部は、絵画、彫刻などについて、作品そのものと文献資料の両面から実証的な研究を進めている。調査に際しては、情報調整室・画像情報室の協力を得て光学的手法やデジタル画像処理技術を活用し、分析の精度を高めるとともに、得た情報を美術史研究のための上質な資料へと加工している。「光学的手法による美術工芸品の彩色に関する研究」は美術作品の調査研究方法の開発を目指し、東アジア地域における美術交流の研究④「重要美術作品資料集成に関する研究」はさまざまな手法によって得た資料を公表・公刊することによって、美術史研究のための新しい資料学の構築を提案するものである。

(2) 基礎資料の継続的な収集と集成：美術部は永年にわたる美術研究資料の収集・蓄積の実績をもつが、今後も継続的にそれらの充実を図るとともに、それらを縦横に活用した研究を進めている。東アジア地域における美術交流の研究⑤「日本東洋美術研究文献の活用に関する研究」、我が国の近代美術の発達に関する調査・研究①「日本近代美術の発達に関する調査・研究—昭和前期を中心に」、②「黒田清輝に関する再評価のための調査・研究—大正期美術との関連を中心に」、③「現代美術資料の研究—資料収集・整理法の確立のための研究」、などは、資料の新たな収集と活用をめざす研究である。

(3) 美術史研究の今日的な課題への取り組み：美術部は、美術の諸問題を今日的な視点から解き明かす努力も行っている。東アジア地域における美術交流の研究①「日本における外来美術の受容に関する調査・研究」では、美術を素材として異文化理解の問題を分析し、東アジア地域における美術交流の研究②「中国壁画の研究」では、史的な研究の成果を踏まえて、文化財保護に寄与しようとしている。美術部は、「在外日本古美術品保存修復協力事業」など、文化財保護に関わる国際協力事業にも参画している。

(4) 研究成果の公表：調査・研究の成果を『美術研究』や『日本美術年鑑』あるいは調査研究報告書として公刊している。また、成果の一端を、毎秋一般向けの講演会である美術部オープンレクチャーにて披露するとともに、情報調整室の協力を得てホームページにも掲出している。

(5) 所蔵作品ならびに研究情報の公開：美術部は黒田清輝（1866-1924）の遺産に基づいて設立された美術研究所を前身としており、現在も黒田清輝の作品や関連資料を保管している。黒田記念室（黒田記念館2階）において毎週木、土曜日の午後にそれらを公開し、さらに1977（昭和52）年以来、他美術館との共催で巡回展「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」を開催している。また、情報調整室とともに当研究所のホームページに開設した「黒田記念館」の内容を高める努力を続けている。

<組織概要>

| | | | |
|----------------|---------------|-------|-------|
| 美術部長 | 中野照男（東洋絵画史） | 研究補佐員 | 小林未央子 |
| 主任研究官 | 勝木言一郎（東洋絵画史） | | |
| 主任研究官 | 津田徹英（日本彫刻史） | | |
| 日本東洋美術研究室長 | 鈴木廣之（日本近世絵画史） | | |
| 黒田記念近代現代美術研究室長 | 田中淳（日本近代絵画史） | | |
| 同研究員 | 塩谷純（日本近代絵画史） | | |
| 広領域研究室長事務取扱 | 中野照男 | | |
| 調査員 | 青木茂（日本近代絵画史） | | |

(4) 芸 能 部

芸能は、人間の肉体という移ろいやすい媒体を通じて伝承されてきた。その本質や変遷を把握するため、芸能部では文献資料や写真・映像記録、楽器などの周辺資料を総合した調査研究を行っている。また、無形文化財・無形民俗文化財の指定、選択などの行政にも対応しうる基礎資料の蓄積もあわせて行い、保存と継承のあるべき姿の追求に努めている。

演劇研究室

能・歌舞伎・浄瑠璃等の古典演劇について、文献を中心とした演出研究等を行っている。

音楽舞踊研究室

雅楽から近世邦楽に至る古典音楽について、伝承と文献の両面から技法の研究を進めている。また、古典音楽で用いる楽器についても、形態の変化やジャンル間の影響関係等を調査している。

民俗芸能研究室

各地の民俗芸能を調査し、それらの芸能史的な位置づけや保存伝承に資するための基礎的な研究を行っている。

1) 文献に基づく研究

長年にわたって能の各家に伝わる型付（舞踊譜）や手付（楽譜）、伝書、歌舞伎番付や下座附帳、市町村作成の民俗芸能調査報告書などを収集しており、その総合的な分析・研究を行っている。また、国立劇場等で行われる芸能公演の上演資料を収集し、今後の上演に資すべく整理をすすめている。

2) 映像・音声資料の収集

「安原コレクション」に代表される SP レコードをはじめとして、SP・LP レコード・オープンリールによる録音データ各種、民俗芸能の現地公開や各種の民俗芸能大会、イベント等の記録撮影を含む VTR・DVD 等の映像資料等の収集に努めてきた。音源資料の内容は『音盤目録』I～Vで公表したが、その一部は複製・復刻等で一般への普及に活用されている。また、所内の実演記録室で各種芸能の技法の録音・録画も行い、その成果は所外の研究者にも利用されている。他の研究機関や大学にはないこれらの記録をもとに、部内では技法の分析研究を行っている。

3) 楽器の研究

各地の寺社や博物館、個人の所有する楽器について、写真撮影・法量計測などの調査を行い、データを収集している。

4) 研究成果の公表

調査研究の成果は、『芸能の科学』やその他の学会誌等に発表している。また毎年1回、一般を対象とした公開学術講座、大学院生等を対象とした夏期学術講座を開催し、成果の一部を広く公開している。

<組織概要>

| | | | |
|----------|-------------------|-------|--------------------|
| 芸能部長事務取扱 | 鈴木 規 夫 (工芸史・文化財学) | 調査員 | 小 田 幸 子 (日本中世演劇) |
| 主任研究官 | 飯 島 満 (近世芸能) *1 | 調査員 | 野 川 美穂子 (日本音楽史) |
| 演劇研究室長 | 鎌 倉 恵 子 (日本近世演劇) | 調査員 | 青木 (近藤) 静乃 (日本音楽史) |
| 音楽舞踊研究室長 | 高 桑 いづみ (日本音楽史) | 協力研究員 | 児 玉 竜 一 (近世芸能) *2 |
| 民俗芸能研究室長 | 宮 田 繁 幸 (民俗芸能) | 研究補佐員 | 中 司 由起子 |
| 民俗芸能研究室員 | 俵 木 悟 (民俗芸能) | | |

※1 平成 16 年 4 月 16 日採用

※2 平成 16 年 5 月 11 日採用

(5) 保存科学部

文化財の材質・構造やそれを取り巻く環境を様々な科学的方法で調べて、保存の現場や美術史、考古学など歴史研究に役立つ研究とその成果の公表を行っている。

化学研究室 文化財の材質や彩色を様々な分析手法によって調査し、文化財の化学的な特徴を明らかにする研究を進めている。ポータブルの分析機器を用いた現地調査も積極的に行っている。

物理研究室 温湿度、空気汚染などを測定して文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止するための研究と、X線、赤外線などを用いた非接触調査手法の開発を行っている。

生物科学研究室 生物が原因となった文化財の劣化の機構を調べ、防除する研究を行っている。現在は特に、環境に被害を与えることの少ない防除法の開発に力を入れている。

保存科学部における研究テーマの設定に当たっては、1) 行政施策面からの必要性、2) 学問分野における先端性と発展性、3) 博物館など保存現場からの要望などを考慮し、化学、物理、生物科学の研究室ごとに研究プロジェクトを設定している。

1) プロジェクト研究

「非破壊調査法に関する調査研究」：材質分析は文化財の保存修復や歴史研究のために今や欠かせないものとなっている。彩色文化財を主な対象として、化学研究室を中心に、新たな非破壊分析方法の開発と現場での測定を目的としたポータブル蛍光 X 線分析装置の改良などを行う。この研究に関連して美術部のプロジェクト研究「光学的手法による美術工芸品の彩色に関する研究」がある。

「臭化メチル燻蒸代替法に関する研究」：殺虫燻蒸剤として文化財にも広く使用されてきた臭化メチルは、オゾン層破壊防止のため 2004（平成 16）年末に先進国では使用が全廃された。そこで生物科学研究室を中心に、文化財材質や人間の健康への影響にも配慮した臭化メチルの代替法とその現場への応用について、文化庁、博物館、美術館、資料館などと密接な連絡を取りながら研究を行っている。

「文化財施設の保存環境の研究」：文化庁美術学芸課からの依頼を受けて実施している国指定文化財公開のための館内環境調査の基礎となる研究である。物理研究室を中心に、これまで室内汚染物質、美術館用免震装置、ハロンに代わる消火剤など公開施設が日常抱えている問題を研究してきた。現在は山車など大きな民俗資料の保存を対象に、現場調査と計算機シミュレーションを組み合わせ、大空間での資料の保存・展示方法の研究を行っている。

2) 国際協力・交流

「文化財保護に関する日独学術交流」・「北米の文化財保存研究機関との国際研究交流」：日独科学技術協定に基づいたドイツとの共同研究で、平成 15 年度よりドレスデン工科大学と石造文化財、石造建造物の保存に関する研究を共同で行っている。また、アメリカのスミソニアン研究機構やゲティ保存研究所、カナダのカナダ保存研究所（CCI）の研究者と、文化財保存に関する国際研究交流を行っている。

3) 研修・指導等

「博物館・美術館等の保存担当学芸員研修」：プロジェクト研究で得られた研究成果は直ちに博物館・美術館・資料館などの現場に生かしていかなければならない。そこで毎年夏に保存担当学芸員研修を実施するとともに、修了生のフォローアップのための研修や、各地の博物館などに出かけて行う地域研修など、受講生の状況に応じた研修を実施している。

<組織概要>

| | | | |
|---------------|-------------------|----------|-----------------|
| 保存科学部長 | 石 崎 武 志 (地盤工学) | 生物科学研究室長 | 佐 野 千 絵 (環境化学) |
| 主任研究官 | 木 川 り か (生物化学) | 調査員 | 山 野 勝 次 (応用昆虫学) |
| 化学研究室長 | 早 川 泰 弘 (分析化学) | 事務補佐員 | 市 川 久 美 子 |
| 同研究員 | 吉 田 直 人 (分光分析) | 客員研究員 | 田 村 守 (超分子分光) |
| 物理研究室長 (事務取扱) | 石 崎 武 志 (地盤工学) | 協力研究員 | 大 野 彩 (フレスコ画) |
| 同研究員 | 犬 塚 将 英 (物理計測) *1 | 協力研究員 | 高 見 雅 三 (物理探査) |

※ 1 平成 16 年 6 月 1 日採用

(6) 修復技術部

修復技術部では、文化財の保護と活用を目的とした修復技術の開発を行っている。このために文化財保護施策に必要な研究、修復における先進性や発展性を保障するための研究基盤の提供、保存修復現場からの要請や国際協力などを勘案して研究テーマを設定している。詳細としては、①修復の基礎的情報となる文化財の製作技法に関する調査研究、②伝統的な修復方法や過去の修復方法など文化財の修復に関する調査研究、③文化財の修復技術・材料に関する調査研究、④文化財の劣化機構の解明と劣化防止のための環境影響評価や保存環境制御などの研究を行っている。

修復材料研究室 修復材料の開発評価、修復材料の適用方法の研究を行っている。

伝統技術研究室 伝統的修復材料・技法の調査を行い、その評価および改良研究を行っている。

応用技術研究室 保存のための環境影響評価や制御、非破壊調査手法などの研究を行っている。

社会的要請に応えるために、1) 近代文化遺産の保存修復に関する研究、2) 周辺環境が文化財に及ぼす影響評価に関する研究、3) 伝統的修復材料の評価改良に関する研究など、以下の事業および国際共同研究を行っている。

- ・近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究
- ・敦煌莫高窟壁画の保存修復研究—日中共同研究—
- ・周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究
- ・伝統的修復材料に関する研究
- ・レーザーによる文化財クリーニング法の開発研究
- ・文化財の防災計画に関する研究
- ・在外日本古美術品保存修復協力事業
- ・国際研修 紙の保存と修復

1) 近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究

近代の文化遺産は複数の材料が用いられ、規模の大きなものも多い。そのため、新しい修復方法や材料の開発が必要である。今までに航空機、船舶、鉄道車両および施設の保存について研究を行ってきたが、平成16年度は大型構造物の保存修復を中心に、保存活動が盛んなドイツ・スイスなどの研究者と日本における比較研究を行った。

2) 周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究

環境要因が文化財の劣化に及ぼす影響について評価し、その影響を軽減させるための研究を行った。臼杵磨崖仏では主として周辺の環境計測による岩表面劣化要因の解明、厳島神社では丹彩色の変退色、日光では環境と膠彩色劣化の関係について研究を行った。また韓国・国立文化財研究所とは、臼杵磨崖仏と弥勒里石仏を研究フィールドにして保存環境評価に関する共同研究を行った。

3) 伝統的修復材料に関する研究

文化財は、そのほとんどが天然材料で作られており、膠と顔料、繊維と糊などいくつかの材料を組み合わせた複合的な構成になっている。前年度までの研究により、古糊や布海苔などの物性や化学的組成が明らかとなった。今年度は、それを踏まえて合成材料も含めた各種膠着剤を対象にその物性に関する総合的な試験を行った。

<組織概要>

| | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-------------------------|
| 修復技術部長 | 加藤 寛 (漆芸技法) | 研究補佐員 | 和田明日香 |
| 修復材料研究室長 | 川野邊 渉 (高分子化学) | 研究補佐員 | 染谷 香理*1 |
| 同研究員 | 早川 典子 (有機化学) | 研究補佐員 | 加藤 恵*2 |
| 伝統技術研究室長 (事務取扱) | 加藤 寛 (漆芸技法) | 研究補佐員 | 須藤 良子*3 |
| 同研究員 | 加藤 雅人 (製紙科学) *4 | 客員研究員 | 神長 博 (工業化学) |
| 応用技術研究室長 | 内田 昭人 (建築学) | 客員研究員 | 渡邊 明義 (美術史) *5 |
| 同研究員 | 森井 順之 (土木工学) *6 | 調査員 | 山本 記子 |
| 研究補佐員 | 是澤 紀子 | *1 平成16年6月1日採用 | *2 平成16年7月1日採用 |
| | | *3 平成16年6月15日辞職 | *4 平成16年9月1日採用 |
| | | | *5 平成16年4月6日採用 |
| | | | *6 平成17年2月1日修復材料研究室に配置換 |

(7) 国際文化財保存修復協力センター

企画情報研究室

文化財研究所が行う国際交流・協力等の専門的事項についての連絡調整、企画及び実施、国際社会における文化財に関する理念、法理論、条約・憲章や諸外国の文化財保護に関する法制度、保護の状況および文化財と政治、宗教、民族との関わりなどについての調査研究を行う。

保存計画研究室

世界各地の文化財の保存・整備・活用計画、地域開発・観光開発と文化財との関わり等に関する調査研究と保存計画立案を行う。

地域環境研究室

世界各地の文化財をとりまく自然環境、歴史的・人文的環境、経済的環境と、それらが文化財に及ぼす影響ならびにその保存対策に関する調査研究を行う。

世界各地に存在する文化財は、それらが所在する国や地域を超えて人類共有の財産として認識され、多くの人々がその価値を享受する権利とともに、国際協力の下にそれらを守る義務をも課せられている。この意味において、多様で豊かな文化財を有し、100年以上に及ぶ文化財保護の歴史と充実した保護制度を持ち、保存・修復のための科学的研究と技術を発展させてきた日本が世界の文化財保護のために果たすべき役割は大きく、また、世界各国からの協力要請も年々増加している状況にある。

日本が文化財の分野における国際協力に本格的に取り組みだしたのは、比較的近年のことである。そのなかにあつて、当所の前身である東京国立文化財研究所は、1990（平成2）年に「アジア文化財保存研究室」を設置し、3年後にはこれを「国際文化財保存修復協力室」と改称し、1995（平成7）年に至り「国際文化財保存修復協力センター」に改組して体制を充実させてきた。さらに、2001（平成13）年の独立行政法人発足にあたり、従来の2研究室を3研究室にするとともに、奈良文化財研究所国際遺跡研究室と連携して、独立行政法人文化財研究所の国際関係活動全般についての連絡調整を行い、国際協力を積極的かつ効率的に行うための体制が整えられた。

国際文化財保存修復センターが行っている国際関係の活動としてはアフガニスタン・バーミヤーン遺跡保存修復協力事業、アフガニスタン文化財専門家及びイラク文化財専門家の人材育成事業をはじめ、諸外国の専門機関・専門家との共同研究や研究交流、専門家を招へいしての研修、諸外国の文化財に関する保存修復協力事業、文化財に関する国際情報の収集と解析、成果の公表などがある。これらの共同研究や研修、協力事業、情報収集・公表の具体的活動の詳細は、プロジェクト毎に別途記載している。

<組織概要>

| | | | |
|----------|---------------|-------|----------------|
| センター長 | 青木 繁夫（考古学） | 特別研究員 | 岩井 俊平（考古学）※1 |
| 主任研究官 | 朽津 信明（地質学） | 客員研究員 | 野口 英雄（国際協力） |
| 企画情報研究室長 | 稲葉 信子（建築学） | 客員研究員 | 宗田 好史（都市保存学） |
| 同研究員 | 二神 葉子（考古科学） | 客員研究員 | 前田 耕作（美術史） |
| 保存計画研究室長 | 岡田 健（美術史） | 協力研究員 | 鳥海 基樹（都市設計） |
| 地域環境研究室長 | 山内 和也（考古学） | 調査員 | 友田 正彦（建築学） |
| 研究補佐員 | 関 博充（文化財科学） | | ※1 平成16年7月1日採用 |
| 研究補佐員 | 大竹 秀実（油画修復） | | |
| 事務補佐員 | 松浦 友美 | | |
| 特別研究員 | 谷口 陽子（保存科学）※1 | | |
| 特別研究員 | 西山 伸一（考古学）※1 | | |